

New forms of learning in co-configuration work 協同構成的仕事における新しい学習の形

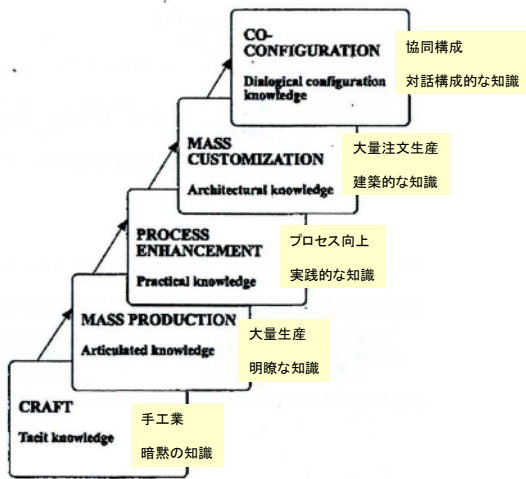
ユーリア・エンゲストローム (2004)

Abstract 要約

- ・協同構成的環境における学習について概説。
- ・協同構成とは、戦略的提携、サプライヤー間のネットワークといった複数の生産者達の協同による新しいタイプの仕事。
- ・協同構成的環境における学習は、非連続的に長期にわたって行われる。
- ・複数の相互連関した活動システム、地方とグローバルに展開した組織において成立する。
- ・学習は、クライアントやユーザーの貢献に大きく依存している。
- ・協同構成は、2重の学習挑戦を仕事組織に課す。
- ・介入的、縦断的方法論について説明する。

I. Co-configuration as a new type of work and production 協同構成という新しいタイプの仕事と生産

- ・Barley and Kunda(2001)は、これまでの組織理論は官僚主義的な仕事の観察を基にしており、今日の仕事の性質上、それら理論の適合性に疑問符を投げかけざるを得ないと主張している。
- ・彼らの主張は組織と職場学習の研究にも当てはまる。仕事の性質の歴史的变化を理解しなければ、組織と職場学習の理論は、一般的で抽象的すぎて、現在現れ始めている新しい形の学習を捉えることはできないであろう。
- ・Victor and Boynton(1998)は、製造産業の歴史における5つの種類の仕事というフレームワークを提示した。(Figure1)



Source: Adapted from Victor and Boynton (1998, pp. 6, 233)

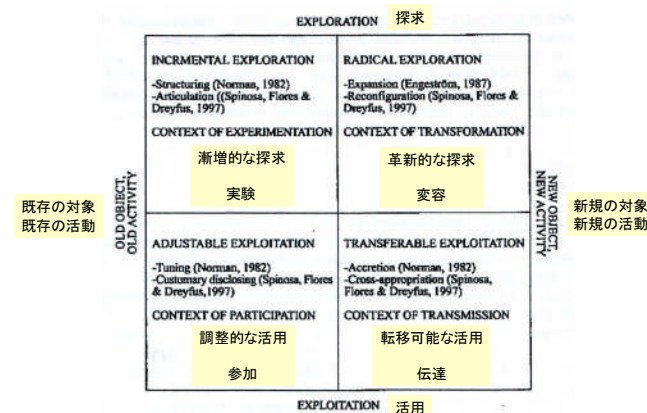
- ・それぞれの仕事は、特定の知識と学習を必要とする。
- ・「協同構成的仕事」においては、顧客－知性 製品/サービスの創造を通して、ユーザーの変化するニーズに対応することが求められる。
- ・協同構成とは、歴史的に新しく現れた仕事の種類であり、次の特徴を持つと言える：
 - ①「顧客の知恵を生かした」製品、サービスに合う

- ②顧客、生産者、製品/サービス間の相互交換が継続的に行われる
- ③持続的な協同構成と長期的な製品/サービスのカスタマイズ (顧客に合わせた仕様)
- ④積極的な顧客の関わり
- ⑤組織内、組織間の多様な協同生産者とのネットワーク
- ⑥協同構成活動を通じての相互学習

- ・協同構成とは、単に賢い適応力のある製品というだけでなく「協同構成的仕事を通じて、顧客が本当の意味で生産者のパートナーとなるのである」(Victor and Boynton, 1998, p199)。
- ・協同構成は、戦略的提携やサプライヤーのネットワークといった多様な生産者達の相互依存的な関係を含む。
- ・協同構成においては、固定化されたただ一つの権威は存在せず、柔軟な「ノットワーキング」が必要とされる (Engestrom et al., 1999)。
- ・協同構成は、非常に要求的である。メディカルケアの状況が参考になる。
- ・多くの患者が複数の病気を持つようになり、今までの標準的な単一診療のケアパッケージでは、対応できなくなってきた。
- ・ヘルシンキでは、3.3%の患者が43.9%のヘルスケア費用を使い、15.5%の患者が78.2%の資源を使っている。
- ・これらの患者の多くは、1人の介護者から別の介護者へと移され、全体を把握している介護者は1人もいないという状況にある。
- ・協同構成的仕事は、戦略的優位を發揮する。なぜなら、複数の介護者と患者相互が学び合い、よくコーディネートされた長期的なケアプランを作り出すことができるからである。
- ・このようなメディカルケアに関わった人は、ゲームのたとえを使って状況を説明した：「ゲームの途中で、盲目のプレイヤーが放り込まれたような状況。大声をあげ、誰がそこにいるのかもわからない。どんなゲームかも分からない。レフェリーもいない、ルールもそこかしこで勝手に作られているような状況 (Kangasoja, 2002)」
- ・成功する協同構成的仕事には対話が必要である。そこには彼らの活動に対するリアルタイムのフィードバック情報がある。

II. Theory of expansive learning as framework and challenge 枠組みと挑戦としての拡張的学習の理論

- ・学習の過程は、二つの軸で整理される。対象と活動が既存か新しいか、そして March(1996)の有名な既存知識の活用か新規知識の探求か、という二軸である。
- ・この2軸により仕事における学習の基本的な4つの種類が描かれる。(Figure2)



Note: The author is grateful to Professor Risto Tuunio for ideas that led to the formulation of the matrix

- ・転移可能な活用。既存知識を新しい対象と活動に伝達する。
- ・調整的な活用。与えられた活動の中での既存知識と技術の段階的獲得と内化。徒弟制度にあてはまる。
- ・漸増的な探求。与えられた活動の中での実験による新規知識の構築。
- ・革新的な探求、または拡張的学習。そこにまだ無いものを学ぶこと。新しく生まれてくる活動のための新しい知識と実践の創造。活動システム全体の質的変容をもたらす学習。
- ・革新的な探求を、Spinosa et al.(1997)は、再協同構成と呼び、それは「より広い地平を獲得するようなもの」と表現した。
- ・これら4つの種類の学習は、お互いが排他的なものではない。Bateson(1972)が指摘しているように、拡張的学習は、他の種類の学習のサブプロセスとも関わりを持つ。
- ・拡張的学習理論は、協同構成的な状況における学習を分析デザインする際の中心的枠組みとなりうる。
- ・まだ理解されていないのが、前進的傾向を持つ拡張学習が、水平的あるいは横広がり傾向を持つ協同構成にどう組み込まれていくのかという点である。
- ・そのようは水平的移動パターンを持つ拡張学習の研究として以下のようなものがある：境界越え (Engestrom et al., 1995) 多声対話 (Engestrom, 1995) 交渉的ネットワーク (Engestrom et al., 1999)、認知的先駆 (Engestrom, in press)。
- ・これらの研究を基に議論していこう。

III. The landscape of learning in co-configuration 協同構成における学習の風景

- ・協同構成的な学習は、通常長期の非連続期間で行われる。それは多様でゆるく相互に関連した活動システム間と異なる伝統、異なる専門領域、異なる言語を代表する組織において達成される。
- ・学習はクライアントあるいはユーザーの貢献に依存している。
- ・異質なパッチワークと大小の生地。
- ・協同構成は、仕事組織に2つの学習挑戦を促す。
 - 1) まず協同構成そのものが学ばなくてはならない(協同構成のための学び)
 - 2) 協同構成的仕事において、組織とメンバーは、ユーザー、製品/サービス、生産者間の相互作用から常に学ぶことが必要になる(協同構成の中での学び)
- ・これら2つの側面—ための学びと中での学び—は、実践の中で合流する。
- ・一般的な仮説として、協同構成的仕事において必要とされ、発生する拡張的学習は、次の3つの特徴を持つと言える。
 - (1) それは変容的学習である。それは斬新なツール、モデル、コンセプトにより、共有された仕事の目的、対象を革新的に広げるものである。この変容的学習と言う協同構成の特徴は、デザイン、モデリング、原文化、対象化、コンセプト化、視覚化に重点を置く。
 - (2) それは水平的で対話的な学習である。それは境界を越えて、活動システムの結び目をつなぐことで、知識を創造し、活動を変形させる。この水平的な側面は、橋渡し、境界越え、ネットワーク、交渉、交換、貿易という活動を重視する。
 - (3) それは隠れた学習である。それはネットワークの錨となり安定させる見えにくい認知の足跡を含んでいる。この隠れるという側面は、空間移行、動き、くり返し、安定、不安定、具体化という活動を重視する。

IV. Methodology 方法論

- ・発達のワークリサーチ/仕事研究 (Engestrom,1993) は、仕事と組織研究に文化歴史的活動理論を適用したものである。

- ・文化歴史的活動理論においては、形成的経験と発達の介入が、当初からこの方法論の必須部分であった。
- ・科学と技術の自然社会学的研究(例：Latour and Woolgar, 1979)は、民族誌的プロフェッショナルの仕事と論文において影響力あるものであった。
- ・Latour (1987)は「アクター(役者)に従え！」と強調。
- ・プロフェッショナルと産業での仕事における最近の民族誌的研究では、話と文章から、アクターが彼らの活動、社会的世界、受け取られた真実を構築することに焦点を当てている(例：Kunda, 1992; Darrah, 1996)。
- ・この姿勢には、アクターに集中し過ぎるリスクもある。活動理論の観点から見ると実践的な活動における物質的な基礎と硬いシステムの動きを失うか無視してしまい、対象の抵抗が忘れ去られてしまう恐れがある。
- ・プロフェッショナルの仕事と会話は、多様な組織単位に社会的、空間的に散らばっていて、それらが相互連関した長い鎖を形作っている。
- ・だからこそ、プロフェッショナルの仕事と会話の対象に焦点を当てることが、それらをつなぐ接着剤として必要であると考えている。
- ・Objects 対象は、Goals 目標と混同されてはならない。目標は、自覚された、比較的短期的、個人活動の有限の狙いである。対象は、雑多な内部的に矛盾した、しかし持ちこたえ、常に再生産される、集団活動システムの目的であり、それは可能な目標と活動の地平を定義し動機づけるものである (Leont'ev, 1978; Engestrom, 1995)。
- ・組織は会話を通じて現れてくるかもしれないが、会話のために組織が生まれてくるわけではない。
- ・文化歴史的活動理論において、活動の対象こそが、変化と学習を理解する鍵になると考えられている (Leont'ev, 1978)。拡張的学習は、段階を踏んだ対象の拡張である。
- ・協同構成状況における拡張的学習の研究は、縦断的、介入的アプローチが取られる必要があり、それは3つの方法論的原則を踏まえる必要がある：
 - ①協同構成的仕事の対象に従う
 - ②対象にクライアントやユーザーの声をあてる
 - ③対象を拡張する
- ・ヘルスケア産業における最初の介入的研究は、1980年代後半に行われた (Engestrom, 1990,1991)。
- ・1990年代の半ばに「チェンジラボラトリー」という新しい介入方法が提示された。
- ・チェンジラボラトリーセッションにおいては、既存の職場での実践と、研究者が持ち込む新しい要素を混ぜ合わせた。
- ・選ばれた仕事の対象は、民族誌的に研究される必要がある。民族誌的に得られたクリティカルインシデンツと例は、チェンジラボラトリーに持ち込まれ、分析と参加者同士に交渉に使われる。ラボラトリーセッションは、ビデオに撮影されている。
- ・ヴィゴツキー (1978) の二重刺激法に従ったこの方法論は、Brown(1992)の説明している実験デザインの拡張版ともいえるだろう。

■キーワードの補足(解説は、山住, 2006より)

★「文化歴史的活動理論 cultural-historical activity theory:CHAT」

- ・人々の協働によって創造される多様な社会的実践活動を対象に、その分析とデザイン、そして変革を統合した研究を展開する領域横断的なパラダイムである(p69)。
- ・研究の分析単位は、文化的、社会的、歴史的な「活動システム」(p70)。
- ・活動理論は、1920年代から1930年代初め、ロシアにおいてレフ・ヴィゴツキーが創設した人間研究の文化歴史学派を起源とする(p72)。
- ・第一世代(ヴィゴツキー)、第二世代(レオンチェフ)、第三世代(エンゲストローム)
- ・第一世代は、媒介性のアイデア「三角形モデル」を生み出した。分析単位は孤立した個人(p91)。
- ・第二世代は、個人的行為と集団的活動の差異を明確にした。

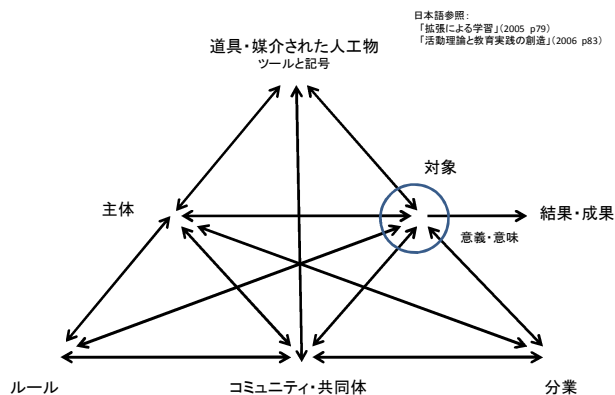
集団的活動システムのモデルへとは拡張しなかった(p92)。

- ・第三世代は、文化的多様性、多声性、対話、相互作用する活動のネットワーク、越境、接触領域といった人間発達がダイナミックに生成される活動システムの水平的拡張を重視する(p93)。

★「活動システム activity system」

- ・個人を単位にした刺激と反応の図式ではなく、人間の協働的・実践的な「活動」を表現するモデル(p82)。
- ・集団的であり、人工物によって媒介され、対象に方向づけられたもの(p82)。

Figure 7.1 活動システムのモデル



★「拡張的学習 expansive learning」「拡張による学習 learning by expanding」

- ・拡張による学習は、ベイトソンの学習レベルⅡ内部の諸矛盾、すなわちダブルバインドの激化によって発火する(p116)。
- ・拡張的学習は、与えられた文脈に疑問を持ち、それをある意味で拒絶し「違背実験」といえるものに打って出て、活動を思い描き直し、スプリングボード(跳躍台)を探し、変化へのアイデンティティ、コンセプト、モデルを創造するという学びである。そのために危険でアクロバティックな学びであるとも言える。それこそが「あらかじめ与えられていない何か」の創造を可能にする(p119)。
- ・順応的(adaptive)探求的(investigative)拡張的(expanded)学習の間を、エンゲストロームは有意義に区別している。拡張的学習は、何よりも学び手が学びの必要性を生じさせる問題の根源を問うときに参照される学習(p122)。
- ・拡張的学習のサイクルは、ヴィゴツキーの最近接領域を集団的に旅していくもの(p129)。

■参考文献

- Y.エンゲストローム(1999) 拡張による学習 活動理論からのアプローチ 新曜社
- Y.エンゲストローム & 山住勝広編(2008) ネットワーキング 結びあう人間活動の創造へ 新曜社
- Y.エンゲストローム(2011) 変革を生む研修のデザイン 鳳書房
- Y.Engstrom (2011) Activity theory and Learning at Work Tha SAGA Handbook of Workplace Learning Ch.7.
- 山住勝広(2006) 活動理論と教育実践の創造 拡張的学習へ 関西大学出版部
- ヴィゴツキー(2003) 「発達の最近接領域」の理論 三学出版
- 柴田義松(2008) ヴィゴツキー入門 寺子屋新書
- 西山 エンゲストロームへの再入門 <http://www001.upp.so-net.ne.jp/niche/library/Room-2A/18.html>